



飛来の眼には

瀬尾夏美

飛来の眼には

あの日、波に追われるようにして鳥は飛び立った。

春が来る前に北に帰って、秋にはまたここへやってくる。

それはただ、毎年のこと。

わたしは、一〇年目の秋もここへやってきた。

はるか上空から見れば、いつだって変わらない風景がそこにあるから。

それでも、この一〇年はすこし特別であったとわたしも思う。

地上の目線に降り立てば、さまざまなことがめまぐるしく変わっていった。

かつてのまちが波に攫われ、水が引けば被災物の山。

それらが片付けられると、まちあとには一面の草はら。

のちに土木工事で土色の世界。

嵩上げで造ったあたらしい地面の上に、角張ったまちが整備される。

そこへ家々が建ち並び、また草木が芽吹きはじめている。

そろそろ、これまで会った人たちを訪ねようか。

懐かしいという感覚を語り合うのに、一〇年の月日はちょうどいい。

わたしを語りなおすとき

砂粒をひろう Kさんのはなしていたことと、さみしさについて

わたしは久方ぶりに、高台のある人の家、——Kさんの家の庭の小さな池に浮かんでゐる。ここは背の高い庭木に囲われているため、その方角を向いても海は見えない。津波の時にはこの庭の内側まで水が上がってきたと聞いたけれど、いまになれば海はずいぶん遠くて波音も届かないのだ。それよりも裏手の道路を走り抜ける工用トラックのエンジン音が近い。この辺りはだいぶ落ち着いてきたとは言え、復興のための工事はまだ続いているという。たった一瞬の大波でまちが壊され、そして直す、——と言っても実際には、もとのまちとはかけ離れた人工的なまちが新たに造られている、と言う方がしっくりくるが、どうにもこのまちの人間が落ち着いて生活できる状態にするには、たいそう時間がかかるらしい。

わたしは赤く咲いた椿の花を眺めながら、この池を初めて訪れた日のことを思い出していた。あれは津波からしばらく経った晴れの日で、なぜわたしがここへ来たかと言えば、馴染みの川辺は漂流物が溜まって近寄れなくなっていたし、そもそも海辺の一带はどこも傷つき、痛々しくて見ていられなかったからである。そして辿り着いたのがこの池だった。久方ぶりで落ち着いた気分になって

眠りかけていたとき、ふと、この家から背の小さなおばあさんが出てきて、こんな状況でも季節になると花咲くから偉いよね、と、あれはたしか小ぶりの赤いバラを指差して言ったのだ。

そんな風に昔を思い出していると、ああらあ、という高い声が聞こえて庭の入り口の方をふりかえる。買った物袋を下げたあのおばあさんがそこにいて、あんだ元気だったの、もう一〇年も経つんだもんね、と言って、胸に手を当ててため息をつく。彼女はわたしのことを覚えていたのか、と思ひながら会釈をすると、おばあさんは、まずね、わたしもいろいろ大変だったの。津波でいっぱい亡くなったけど、もうあのと亡くなった人も多いんだもんね。わたしもふたり看取ったの、と言った。それでわたしが、誰が亡くなったのか問うのを一瞬ためらっていたら、彼女は、仕方ないのね、わたしもこんなにおばあさんになってしまったもんね、と笑って、右手の人差し指で目尻の皺しわを軽く延ばした。わたしの記憶からすれば、当時の方が彼女はずっと老けて見えていたと思う。赤く染めた毛の根元が伸びて白髪が目立っていたし、とても気が気でないという感じで表情も強張っていた。わたしはあの日初めて彼女に会ったのだけれど、にも関わらず彼女は大変な勢いで話しつつづけていた。目の前に降りかかった悲劇を嘆き、自分よりも不遇な人たちを思いながら、申し訳ないと繰り返した。何もできないでしょう、何かしてやりたいけども、何て声かけていいのかわがんないでしょ。この辺の人でも友だちでも、まず、それぞれ境遇が違うから。うちは家も家族も無事だから、余計なことを語って傷つけてしまつては悪いでしょう。そう思うと何も語らんねえのさ。

わたしは、おばあさんの語りに相槌を打ちながら、当時のわたしがぼんやりと感じていたことを思い出していた。それは、彼女が抱えているものは、途方もなく大きなさみしさなのではないか、ということだった。大変なことを目撃してしまったから、誰かと語り合いたい。でも、傷つけてしまうくらいなら、いっそ口をつぐもう。当時、このまちの人間たちはみな似たようなことを考えていたのではないか。さみしいのならばむしろ寄り合えばいいのにと鳥は思うが、とはいえ、あの人もさみしいようだからおしゃべりでもしたらいい、なんて他愛もない提案もできなかった。なにせ、あの頃の人間はみな傷だらけで、誰かの話を聞くという余裕がなくて、だからわたしも何も言わないまま、あの春の日、静かに北へ帰ってしまったのだ。

おばあさんは、あなたはあんまり変わりがないな、と笑いながら、来た方をくると振り返って、高台の道路に繋がる斜面に建った新しそうな家を指差す。そして、あのお家の人ね、津波でご家族みんな亡くしてひとりになったでしょう。それでもちゃんとお店も自宅も再建したのね。だけんと、いまままだひとりで居るんだって。だからわたし心配でさあ、顔合わせた時には、そろそろ家族作ってもいんでねえかって話すだけだね、すつと、おれはもういんだって、ひとりも気楽でいいもんだって笑うの、と言って、こちらをちらりと見やって、でもまず、人それぞれだから。こころは人それぞれだからね、と続けて、ひとり納得したように頷いた。彼女の目がわたしを捉えたのが、あなたどう思う？ という風に尋ねられた気がして、あんなに立派な家にひとりさみしいかもし

れませんね、という言葉が出かけたけれど、でもその人にはその人の考えがあるからそれでいいのかもしれないですね、とわたしは答えた。彼女は、そうなんだ、とため息をついて、難しんだ、と言った。わたしはこの、難しんだ、という声を聞いた瞬間に、懐かしい、と感じていた。なぜだろうという一瞬の混乱のあと、そうだ、たぶんまったく同じ声を一〇年前にも聞いたのだ、と思った。あのとき、このおばあさんは誰にも言えないことを抱えている、さみしさを抱えている、という感覚が、その声によく表れていると感じていたのだ。それが、いまま変わっていないとしたら。いや、もしかすれば彼女はすつとすつと昔から、難しんだ、というこの声とともに生きてきたのかもしれない。

まず上がらい、お茶でも飲んでいけ、と言って彼女は家の中に消えた。わたしが玄関まで進むと、廊下の奥から高い足音が近づいてきて、ほれ、足さ拭いて、と言って、固く絞った雑巾を上がりかまじに広げてくれた。足を拭き、居間の掘りごたつに誘われて入ると暖かい。彼女は、何もなくてごめんね、と言いながら、慣れた手つきでリングを剥いていく。これがじいさんが作った最後のリングなのさ。古くてあんまりうまくないかもしれないけれど、と言いつつ、でもせっかくだからな、と笑う。そして彼女は、懐かしい、あんだ一〇年ぶりだもんね、と言ってまじまじとわたしを見た後、部屋のあちこちに飾られた写真を指差しながら、上の孫は学校出て就職したったの、あっちの男の子はいま大学で頑張ってるのね、と話すのだけれど、それらはそれぞれ中学校や小学校の卒業写真なので、わたしはその顔に一〇年あまり分の時間を足さなければならぬ。

ほら、この写真見て。不意に声が弾んでいる。そして彼女は、これがわたしの実家なの、と言いながら、背後の柵から古びた写真立てを取り上げてこちらに見せてくれる。これが母さんで父さんなの、兄さんが戦争さ行ぐときに撮った写真なんだね。

わたしは目の前に置かれた写真立てを眺めながら彼女を探してみるが、茅葺き屋根の平屋の前に、きちんと並んだ家族の姿は、ざっと十数名になるだろうか。軍服を着た少年がおそらく兄なのだろう、彼は白い禪たすきをかけて思いがけず笑顔である。肝心の彼女はおかつぱ頭の少女で、面影を探すのは難しいほど幼い顔をしており、母親だという着物の女性の隣に無表情で立っていた。昔の家はこんなだったんだものねえ。ほんとに世の中変わってしまったんだものねえ。うちでは馬っこ飼ってたから、毎晩水さ汲んで、馬っこさやんのがわたしの仕事だったんだもんね、と言って、そして一年経つと市場に持って行って売るんだ。でもやっぱりあれは悲しかったがなあ、と回想した。彼女のふるさとはこちらから数十キロ内陸にあるという。たしかその辺りは山間の農村という感じで、いまは駅に続く国道沿いにポツポツと店があり、あとは大きな病院が建っているという印象しかないけれど、こうして彼女に話を聞いてみれば、いったい当時はどんな村だったのだろうと、いつもは素通りするだけのまちにも興味が湧いてくる。彼女はそんな村の、彼女のふるさとの、ずっと昔の話を淀みなく語る。

わたしの子どもの頃は、よく傷しやうい痕軍人が訪ねてきたった。それで母さんは、いつでも迎えられるようになって、毎日おにぎり作って置いていたのね。わたしも子どもだったけど、軍人さんたち苦勞したんだ、大変なんだって、なんとなくはわかってたんだね、と彼女は言って、手元の湯呑みをくるくると揺らしながら中を覗き込み、戦争もあったんだもんね。津波もあったもんね。それでもこうして暮らしてるんだもんね、とつぶやいた。

わたしは、津波からすぐの、あの風景を前に猛烈に語っていた当時の彼女が、このまちはすべて失くしてしまった、わたしは生き残ってしまった、と嘆きながら、失くなってしまったものこそが必要なんだと訴えるように語っていたのを思い出していた。そして同時に、けれどいま彼女の毎日が、たとえ失くなったものそのものは戻って来なくとも、穏やかにたんと進んでいることの自然さを思った。

数秒の沈黙にはっとして、先ほどの会話の終わり、——傷しやうい痕軍人のためのおにぎり居間に置いてあったという話を振り返りながら、じゃあ家の中に知らない人がいるのも普通だったんですか？とわたしは尋ねた。彼女は、あはは、と高い声で笑い、そうだね、学校から帰ってくつと、土間しやういんとこさ傷痕軍人さんが居たったこともあったがねえ、と回想し、とにがわたしの母さんという人はそういう人だったの。自分の家に何もなくても、困った人さ見でしまったら何にもしないわけにはいかないんだね。だからね、わたしもそういう気持ちがなくわがごとこあんの。と一気に話して、ああ。それで看護師になったつうのもあがもな、と妙に納得したように頷いた。

そしてわたしは、そうだ、彼女は長らく看護師をしていたのだ、と思い出す。それで海辺にあった病院に長く勤めていて、その建物が屋上近くまで水に浸かった、かつての仲間が大変な目に遭ったと話していたのだ。

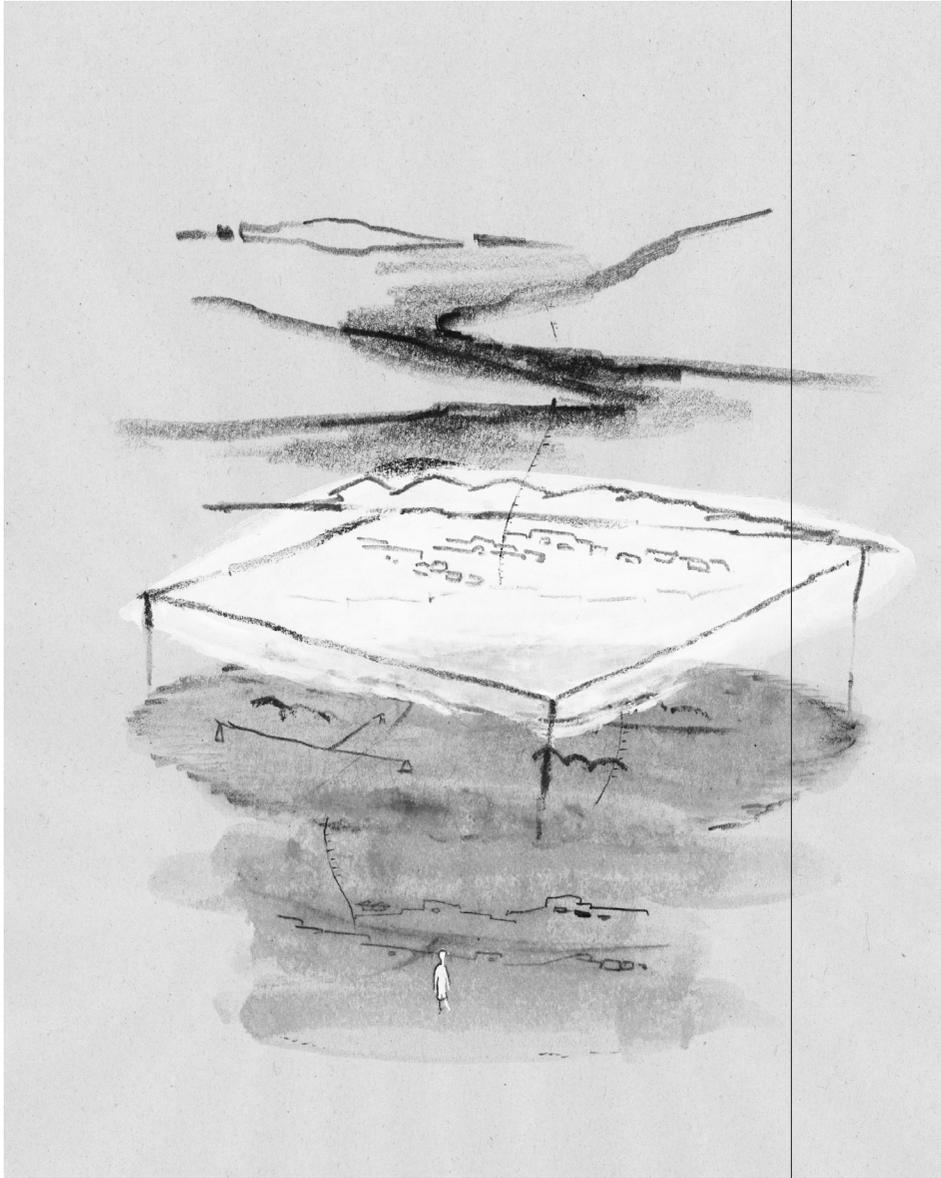
たんたんが進もうとする語りに、そうですか、なるほど、などと相槌を打ちながら、わたしは会話をつなぐように、看護師の仕事は楽しかったですか、と問うてみた。すると彼女は、まず、働くばり働いたんだもんね、と言って首を傾げた。わたしは女だども定年まで勤めたからね、それでも仕事ばりやって、家のこともしねえのは悪いからって、家のことも一生懸命やったの。姑さんとも嫁さんとも難しいごどはあったけど、まずな、じいさんが優しい人だからよかったんだ、と言った。

そうか、とわたしは思った。彼女が生きてきた八十年あまりの時間が、いままた一本に繋ぎ直されている。子どもだった、戦争があった、嫁に来て働いて、子どもを産み育て、孫を抱いて、そして津波が来た。家族の世話をして、介護をして、伴侶を亡くして、いまがある。一度の津波ですべてが失くなって、時間すら途切れてしまうわけではない。

すこし茶色くなりかけているリンゴを口にしてみると、多少乾いた食感ではあるが、じんわりと甘くておいしい。わたしは、ところで最近はどうですか、と尋ねてみる。彼女はふっと小さく息を吸って、まあ落ち込んだり、それでもながったり、そのときときだ、と笑う。

台所の入り口にぶら下がった時計が低い音で鳴る。彼女はぱつとうしろを振り返り、嫁さん帰って

くつと気にするがら、あんた、もうそろそろだな、と言った。わたしが、ごちそうさまでした、と頭を下げて、今度はこのまちへ嫁いだ頃の話聞かせてください、と言うと、彼女は顔をほころばせて、語るごどはいっぺえあるがら。だって八十年分あるんだものな、と笑って庭先まで見送ってくれた。



わたしは上空まで一気に上がり、南に下りていく。

震災後に取り付けられた発電用の風車の音がときおり響いて、

あの羽にぶつかって死んだ友を思い出す。

この一〇年でまちの風景はかなり変わった、と思う。

攫われた海辺の市街地の改修と護岸整備はもちろんだが、

それに関連して山々も大きく削りとられた。

あらゆる空き地には、太陽光発電のパネルが並べられている。

あの山や浜や空き地に暮らしていたものたちはどこへ行ったのか。

人間以外の生き物が、時の流れの中で連鎖するように、“被災”している。

津波で流された畑に、老人がリンゴの木を植えたのを見たことがあったが、

それも工事の都合で数年後に伐られ、ついに実をつけることがなかったという。

工事車両を見つめながら肩を落とす老人越しに、

わたしは、薪みたいに細かく裁断されて積み重ねられた、リンゴの枝葉の痛みを思った。

いまやそのリンゴ畑の跡地も、立派な住宅街となった。

海際の田んぼはきれいに整備され、数年前から米づくりを再開している。

その前までは大きな水溜りのようだった。

あるとき、わたしがそこへ浮かんでいると、男に声をかけられたことがある。

聞けば、人を探していると言うので、水の中を探してやったのだ。

誰もいないと告げた後の、男の丸い背中を思い出す。

見つからないはずの人を探す男は、まもなく亡くなったのだと言う。

地底のまちをたしかめる

波のした、土のうえ

およそ三年間にわたる嵩上げ工事の末に造られた新しいまちを歩いているのは、あの三人である。けれど、それぞれ別の道筋を選ぶから、互いに出会うことはない。このまちではそういうことが多いと思う。近しい人も、きつと気があう人も、意外にも出会うことができない。もつとも、まちとは案外そういうものかもしれない。

嵩上げ地の際を歩いているのは、あの女性である。何かを探しているようなので、おうい、と呼びかけてみると、彼女は上空のわたしを見つけて、そこにいたの、と手を振って笑う。そして、実家がどこにあったか探しているの、あなたも一緒にどう？　と尋ねるので、わたしは彼女の横に降り立った。ほら、わたしたちもお店を再建したの。こうして見るとあんなに高いのね。いつも店の方にいると山並みに違和感があるんだけど、ここならすこし落ち着く。

嵩上げ工事によって、まちはだいたい三段階の高さに積み重なるような構造になった。海際の一帯は元の高さのままで農地となっており、その次の高さには公園や運動施設が広がり、もう一段上があると、新しい市街地がある。いまわたしたちがいるのはちょうど二段目の高さで、彼女は海を背にして見慣れた山々の方角を向き、まだまばらな商店群を指差している。埋められていくときはあんなに辛かったのに、いざ埋まってこうしてまちが出来てしまうと、ここで生きてもいいよねって思ったの。

彼女はひと呼吸置いて、あつちに昔の線路が見えるところがある、と言い、すたすたと進んでいく。復興工事によって巨大化した川の堤防に架けられた、やけに立派な橋の欄干から下を覗き込むと、そこには嵩上げの土盛り山のすきまがあり、数メートル分だけ錆びた線路が見える。この線路を北にまっすぐ進んだところに実家があった、たぶんあの球場の入り口の下あたりだと思っただけだ。彼女はそちらの方向をじっと見やっつて、でもちょっと正確な位置はわからないなあ、とつぶやく。そして、この線路の先にあのまちがある、というのはいかがでしょう？　とすこし笑いながら、ちょうど土盛りの土に線路が埋まった際きわの辺りを指差しながら問うので、それはいいかもしれないですね、とわたしは首を縦に振った。

もちろん忘れたわけではないし、というよりも、いつもあのまちや、あの人たちのことを思うっただけだね。だからむしろ、昔よりも身近になったような気もするんだけどね。でも、一〇年前のことは、ああ、そんなこともあったなあと思うようになった。

あの市街地から見る夕焼けは、下のまちから見るよりもきれいだって、ご近所さんが教えてくれたの。わたしも、自分の店の前で見る空が一番好きだと思う。なぜでしょうねえ、と彼女が問うので、わたしは、空が近いからですかね、と答えると、そうかそうか、あの人たちともちよっと近くなっただ、と彼女は独りごちて、そろそろ店に戻りますね、と言って市街地の方を向き直る。足取りは軽い。もはや馴染みの道を、いつも通りという感じで、携帯の着信を確認しながらまっすぐに進んでいく。わたしも別れを告げて飛び立つと、いつもより空の色が濃いようだった。

*

津波の後、草はらのようだった数年の間、山際の一角には弔いの花畑が広がっていた。嵩上げされたその上のあたりを、いま、ひとりの男と、花畑のおばちゃんたちのグループが歩いている。両者はとても近くにいるのだが、すこしの時差で、顔を合わすことがなさそうだ。

肩を落として歩く男の丸い背中が気になって、わたしは彼の前に降り立った。男は、おう、と軽く手を上げ、久しぶりだなあと目尻を下げる。そして、おれも老けただろう、もう一〇年にも

なるがら、と言って、禿げた頭を手のひらで撫で上げる。わたしが、お変わりないようで、と頷くと、埋められた石を探してみでんのさ、と男は答える。道路の向きも変わったがら、もう正確にはわかんないんだけどね。山の形から察するに、ここらじゃないがなあと思って、と指し示すその指先は空中をぶかぶかと揺れている。

男が探しているのはこの辺りで大切にされていた巨石で、古くから子どもたちの遊び場や、祭りの準備のための広場として親しまれていた。たしかに、このまちが何度津波に攫われてもこの石だけは流されず、だから人はまたそれを目指して集まり、やがて集落をつくり始めたものだった。だがそんな石も埋められて久しい。

懐かしくて、休みの日なんかは妻と一緒にここへ来て、しばらく歩いたりするんだけど。道も変わったし、川も埋め立てられたし、住んでいる人も違う。だからもう全然何も残っていないんだが、それでもふたりで来たい場所ってここくらいしかないもんでね。と言って男は、あの辺りにおれの家があって、その隣に幼馴染がいて、あっちがもうひとりの友だちの家、とそれぞれ指を差してから、昔のことをポツポツと、でも明るい調子で語りながら歩き始めた。やけに広い嵩上げ地は、宅地ごとに四角い区画に分けられてはいるものの、いままだそのほとんどが空き地で、短い草が一面に伸びている。時に男はその宅地に入っって、さくさくと踏みしめながら進んでいく。その足取りが、

かつての道筋を辿っているようにも思えた。

わたしは、およそ五年前、復興工事を目の当たりにして立ち尽くしていた男の姿を思い出していた。だから、いまこの男は足下に何があったのかと思いつぐらせながら歩いているのではと勘ぐって、ずっと暮らしていた場所が実際に埋め立てられてどうか？ と問うてみる。すると男は、ああ、と息を吐いてその場に立ち止まり、ポケットに手を入れたまま顔を上げて辺りを見渡して、ここに住んでいたんだなあと思うだけさ、と言った。

いつかはこの辺りに住みたいねって話してるんだよ。ほら、買い物に便利だからさ、と笑って、妻に渡されたというメモをポケットから取り出し、指先でひらひらと揺らす。

またな、と言って手を振る男と別れた。

*

誰かの宅地——と言っても一見ただの草はらであるが、日当たりがいいので気に入った一角にわたしは座っていた。実は上空から見るとこの嵩上げ地の様子は、津波による被災物が片付けられたあと、工事が本格化する前までの数年間まちあとに広がっていた、あの草はらと重なる。

思い返せば、あの草はらがあった時期は、特別ゆっくりと時間が流れていたように記憶している。

あちこちに人が歩いていて、それぞれ花を手向けたり、おしゃべりしながら何かを思い出したりしていた。このあたりの一帯にはおばちゃんたちが広大な花畑をつくっていて、それは、ここに生きた人たちを弔うために始められたものだった。わたしはその中心にあった例の巨石でよく眠っていた。濃い灰色の石が太陽の光を吸収し、いつでもじわじわと暖かいのだから。その熱を思い出しながら、わたしはうとうととなる。本来わたしは一日のほとんどもを寝て過ごす鳥なのだから。

しかし、近づいてきた高いおしゃべり声で目を覚ますと、数メートル向こうに花畑のおばちゃんたちがいる。誰かが、花畑はここらだったかしら、と言えば、違う違う、あっちだと思うよ、いやこっち、と言いつ合っとなかなか進まない。それぞれに腰を曲げたり膝を庇ったりしながら、ゆっくりと歩いてくる。

わたしは立ち上がって道路の真ん中あたりまで進み、ペこりと頭を下げた。先頭にいたおばちゃんが、ああ、と言うと、みなに連鎖したように声上がる。わたしが、お久しぶりです、何かお探しですか、と問うと、おばちゃんたちは、たまに来てみたいねって久しぶりで降りて来たの、と答える。いまわたしたちはあの山の上に住んでいるの。みんなご近所だからね、さっきまで一緒にお茶しててね。ところであなたはもうどうしてたの？ そう問われたはずなのに、答える隙はなくおしゃべりは続くので、わたしは、はい、はい、ええ、はい、と小声で相槌を打ちながら、首をちょこちょこ縦に振る。

花畑のとき、楽しかったがねえ。いろいろな人来たもんね。あんたもよく寝たもんね。あそこでいろんな人に出会ったんだもんね。とひとりが言うのと、おばちゃんたちは互いの顔を見合いながら、津波前はわたしらも顔見知り程度だったんだけどね。花畑をやっているうちに仲良くなって、いまもこうしているんだもんねえ、と笑う。そして、ありがたいやあ、ありがたいやあ、と口々に言いながら、互いに背中を支えあって歩いていく。

馴染みのおばちゃんが立ち止まったので、さっきおじさんが、ここに石が埋まっているはずだと言ってきましたよ、と伝えると、ああそうだったかねえ、とつぶやいて目を細める。やっぱり懐かしいですか、と問うと、すごく懐かしいよ、とため息を漏らす。彼女の目は何かをじっと捉えている。丁寧に植えられた色とりどりの花を、わたしは思い出す。

彼女は不意に山側を背にした道路向かいを指差して、ここに自宅兼店舗があつてね。わたし、あの日も事務所にいたの、と言った。大きな揺れで大変だったんだけど、津波が来るって頭はなかったの。夫は山育ちだけど冷静で、集会所とご近所さんにかけて声かけて戻ってきて、危ないから行くぞってわたしを連れてあつちまで上がったの、と言って、くるりと振り向き、削られて赤茶けた山肌を見上げる。そしてすぐに津波でしょ。高台で点呼を取ったとき、あの人いない、あの家族いないってわかったの、とつぶやく。

短い沈黙に、その時の話は初めて聞きました、とわたしが言うと、あなたとももう長い付き合いになるのにねえ、とおばちゃんは笑い、まだまだ話してないことはあるんでしょうね。また来年の秋にはお会いしましょう、と言った。

彼女は、おうい、と手を振って、車に戻っていくおばちゃんたちを呼び止める。はやく、はやく、と言う風に、彼女たちが高い声で笑いながら手をこまねている。

わたしは草はらに戻って、眠りながら夕暮れの赤い空を待つことにした。

夜になろうとする空を飛ぶのは困難だが、

地上に灯る無数の光を見れば、ここに生きる人たちの息遣いを感じられる。

津波の後の真っ暗な地面がチラリと過ぎりながら、

しかしこの光景はその前の、以前のまちと、当然のように重なっていく。

わたしは、この光景が好きだと思う。

この光の中に、かつてここで生きた人たちもちゃんといるのさ。

そう語った男の声が思い出される。

そうだ、死者も生者もともにいるのだ、と語ることもできよう。

忘れられてしまうのではなく、そのあり方が馴染んでいく。

鹿の群れが街灯に照らされて、長い影が跳ねるのが見える。

激しい土木工事で棲み家を追われたのだろう。

彼らの行く先に、あたらしい棲み家は見つかるだろうか。

このまちにその余白は、ちゃんとあるだろうか。

人間たちと獣たちは、ともにいることができるのだろうか。

このまちを営む

声の辿り／二重のまち

ここからは、懐かしい人をひとりひとり訪ねようと思う。会えない人もいるだろうが、それは仕方のないことだ。ついに再開された日常は、とても忙しないのだから。

高台に自宅が残った人は、いつかと同じように夕飯の準備の最中である。キッチンに立つ後ろ姿に、お元気でしたか、と尋ねると、おかげさまで変わりないです、とこちらを振り返って笑う。居間の片隅には小さなテーブルが置かれており、その上が彼女なりの祭壇となっていて、真ん中には初老の男性と女性の遺影が並んでいる。以前訪ねた時は、その写真立ての真新しさが胸に刺さるような感じもあつたけれど、いまやそのフチの部分にすしだけ埃が溜まっているのを見つけて、不思議とホッとする。ふたつ揃いのガラスの花瓶には、相変わらず新鮮な花が供えられている。そして、テーブルの表面をすべて埋めてしまうかのように、誰かの手作り風の毛糸やフェルトのマスコットとか、お土産もののお菓子や果物、手紙のようなものなど、ともかく色んなものがこまこまと並べられていて、この一〇年に積み重ねられた手跡を思う。

台所から、お構いもできなくてごめんね、という声が飛んでくると、わたしは、いや十分です、と答えて、一緒に写真を撮ってもいいですか、と声をかける。彼女はすし意外そうな顔をしたあと、散らかってるけど、いいかな。と言って、祭壇の横にちょこんと正座をした。わたしが反対側に立つと、ちょうどふたりで祭壇を囲むようになる。彼女が、よかったね、と誰に言うでもなくつぶやくと、セルフタイマーのシャッターが切れる。すしし皺が増えた彼女の目元は、遺影の中で微笑む彼女の母親に、ずいぶん近くなったと思う。

*

嵩上げ地の外れにオレンジ色の光、真新しい家がポツリと建っている。その玄関先で手を振る人の腕には丸い赤ん坊がいて、右膝のあたりには小さな男の子が隠れている。聞けば、彼らは山間の仮設住宅で生まれて、この半年でここへ降りて来たのだという。ふたりには津波の記憶はもちろんないけれど、津波をきっかけにこのまちに戻ってきた父親と、ずっとここで暮らしていた母親が出会って生まれたという話であるから、その生い立ちには、すでに出来事が含まれている、と語れなくもない。津波で消えた命が無数にあるが、一方で、津波がなければ生まれなかった命が、このまちにはすでにたくさんある。わたしはただの一羽の鳥として、それはとてもふつうのことだ、と言っ

てみる。

すっかり母親の顔をした彼女は、赤ん坊の額を撫でながら、やっぱり子どもがいるってたのしいですよ。化粧もおしゃれもしくなってきたけど、いまのわたしもいいかなって思います、と言って、にっこりと笑う。わたしはあまりに優しく穏やかなその顔つきに、すこしだけ驚いていた。まるで、違う人になったかのよう。いや、彼女は昔からこういう人だった。

モジモジとして目が合わない男の子は、小学校に上がる前くらいの年齢だろうか。わたしは彼の顔を覗き込んで、この下にまちがあったのを知ってる？ と尋ねてみる。すると彼は、ぱっとこちらを見てコクリと頷き、お父さんとお母さんが生まれたまちだ、と答え、あつてるよね？ という風に母親の顔を見つめた。彼女は、そうだよ、よく知ってたね。いつもお父さんが話してるもんね、と言って彼の頭を撫でたあと、わたしの方を向き直り、この下にあのまちが埋まってると思うと、なんとも言えない気持ちになりますよ。でも、埋まってしまったからこそ、あのまちは永遠というか、変わらないままあり続ける気がして。だから、それも悪くはないのかなって考えるようになりました、と言った。

幼い子らと一緒に歩くにはいささか暗すぎるといふことに気付きながら、わたしたちはあたりをすこし散歩してみる。まだ数のすくない街灯が近づいてくると、男の子ははしゃぐようになってダッシュする。彼女はふと思いつ出したことを、その場に置いていくみたいにはつぽつと話す。たぶん

わたしの実家がこの石碑の真下あたりで、夫の実家は、それこそいまの自宅のお向かいさんの下あたりみたいで。不思議ですよね、たった百メートルくらいしか離れていないのに、これまで出会わなかったなんて。

彼女の腕に抱かれた小さな赤ん坊が、まるで目当ての星を探すように、空の方を見つめてキャッキヤと笑うので、みなもつられて、いつまでも笑っていた。

*

小さな港に、男の車が停まっている。わたしはすこし手前に降り立って、やっぱりここに居ましたか、と大きめの声で話しかける。男は、座席ごと倒していた身体を起こして窓を開け、わたしを見つけて、お、という声を上げる。そして、べつにいつも変わりはないさ、変わったことと言えば家を建てたことくらいで、あとは前とおなじ、と言った。港の工事はそれでも早めに終わったかな。釣り人も漁船もすぐに再開したしね。もつとも、海や波や風は、一度の津波で変わってしまうものではないと気づいた時には感心してしまったがな。当たり前のことなだけどさ、そもそも人間なんか関係なくて、ずっとずっと昔からここにあるものだもんね。

男は車内いっぱい、という感じで伸びをしたあと、ドアを開けて車から降り、冷えるなあと

つぶやいて上着のファスナーを首元まで引き上げた。そして、海はいいよなあ、一日一度は海を見ないと落ち着かないんだっけ。つくづくおれは、海のまちの人間だったんだなあと思うよ、と言った。わたしが男の言葉に同意をし、海はいいものです、と頷くと、おれの家は八〇年のうちに三度も津波に遭ってるからね。今度の津波の後、なんでそんなところに住んでたんだって何度も聞かれたよ。でもおれ、うまく答えられなかったんだ、と言った。わたしは男の横顔に、なんでだと思おう？と問われた気がしたが、なんと答えていいのか本当にわからないと思って、ひとまず相槌のように、うーん、と答えた。男は、ね、とだけ言い、濃い藍色の深い海に向き直り、軽くストレッチのように脇腹を延ばす仕草をする。

津波の後ね、ここは海があつて山があつて川があつて、箱庭みたいにしてすべてが揃ったまちだったんだなあと思つたよ。ここに生まれてずっとここにいてよかつたなあと思つたんだ。

沖合から小さな光が近づいてくる。男は、お、今日も無事で帰ってきたな、とつぶやいて、じゃあ帰るか。おれはいま、あっちの高台に住んでるから、気が向いたら寄つていいよ、と言いながら車に戻つていった。

*

高台へと続く国道沿いに、プレハブの喫茶店がある。久方ぶりそのドアを開けると、見知った顔の常連客の男と店主がこちらを見つけて、いらっしやい、と迎えてくれる。カウンター席の端っこに腰かける男は、お元気でしたか、あれはどうなりましたか、このまちも変わったでしょう、と矢継ぎ早に問うてくる。わたしがそれに、おかげさまで、ぼちぼちです、そうですね、本当になんか変わったんと応答するので、お互いに、変わってないですなあと言つて頷きあつた。男は、わたしはいま嵩上げ地の山際にある公営住宅に住んでいますよ。そのうち遊びに来てください、眺めだけはいいいので、と言うので、わたしは、ぜひ行きます、と答えて、住み心地はどうですか？と問う。男は、まあ悪くないです。あつたかいし、ひとり住むにはわりと広いですからね、と言つて、また手持ちの本に目を落として沈黙となる。

店主が水を出してくれて、しばらくです、と言つたので、お変わりないですか？と尋ねると、彼女はすこし目を伏せて、ええなんとかね、やつとここも移転するの。仮設のお店を卒業して、まちの方に新しく建てるのよ、と言つて、設計図が印刷された擦り切れそうな紙を取り出した。わたしは、おめでとうございます、とつぶやいてその紙を覗き込む。そして彼女は、これでやつといろいろ聞かれなくて済むかなあつて思うの。仮設のままだと、どうしても震災の話聞かれるでしょう。とくに遠方から来てくれる人たちは、あんまり機会もないだろうからね、あの時どうだったんですかって聞かれると、答えてやんなきゃつて語つてしまつてしまうでしょう。すると、夜すごく落ち

込む。語るたびに、あの上に引き戻されてしまうような感じなんだよね。だから、これまで積み重ねてきた時間分、戻ってくるのが結構大変なの、と言った。

わたしは、ああ、なるほど、うーん、と言った具合で相槌を打ちながら話を聞いていて、訪れた会話の切れ間に、やっぱり語ると戻ってしまう感じなんですか？ と尋ねる。彼女はすこしの沈黙のあと、完全に戻るっていうんじゃないんだけどね、とつぶやいて、うーんと唸った。なんていうのかなあ。わたしね、本当は自分が答えられないはずのことまで語ってきてしまったような気がするの。だから、本当とは違うどこかに行ってしまったって感じるのかも、と言い、うんうんと自ら頷き、そしたら最近ね、自分で語りたいたいことがないっていうかね、自分がすっかり空っぽになってるってことに気づいたの、と続けた。

どうしたらいい？ と言う風な顔で彼女がまじまじと見つめてくるので、わたしは、わたし自身のなかにあるバツの悪さのようなものにチクリと刺されながら、こちらを向いた常連客の男の目に促されるようにして、それでもまた聞きに来ていいですか？ と彼女に尋ねた。彼女は、ふふ、と笑って、コーヒーさえ注文してくれればいいかな、と言った。

本来飛ばない夜更けの空だが、今夜は月が明るいで怖くはない。

本当にあちこち、もうほとんど言っていないくらいの小山が削られて、まじゅうに新興住宅街が造られた。

まったく同時期に整備されたまちなみは、

どこも似ていて見分けがつかない。

どこかの高台の、どこかの曲がり角で、わたしを待つ人がいるはずだ。

おうい、という声が聞こえる。

あちらから、こちらから。

わたしはその声のする場所をあちこち巡っていく。

そのひとつひとつすべてに、語られるべき話があるというのだから。

ここは確かにあのまちか、と問う声には、

当たり前だ、だからわたしはここに来るのだ、と答えてやる。

明け方の空気はとびきり澄んでいて、旅立ちにちょうどいい。

わたしは白く巨大な堤防から、濃い藍色の海を見ている。

小船が沖へ出ていく。

水平線から昇る日を背にして、わたしは北へ飛び立った。

飛来の眼には

絵・文 瀬尾夏美

デザイン 隅井研太

この冊子は、小森はるか+瀬尾夏美
による作品『飛来の眼には』の一部と
して発行されています。

komori-seo.main.jp

制作委託

アーツ前橋

「聴く 共鳴する世界」展

(二〇二〇年十一月二日

—二〇二一年三月二二日)

Commissioned by Arts Maebashi,

for the exhibition

"Listening: Resonant Worlds"

(Dec. 12th, 2020 - Mar. 21, 2021)

